

■ポイント

この寝取られ小説のテーマは、『漂流先の無人島で生き残るために夫以外の男性に抱かれ続け奪われる人妻』です。

新婚旅行の最中に乗っていた船が沈没してしまう。

夫婦共になんとか助かったが、流れ着いた先は、現代の文明とは程遠い無人島だった。

生き残るために5人の生存者と協力しながら共にサバイバル生活を強いられることになった新婚夫婦。

極限のサバイバル生活の中で、美しき若妻を狙う1人の漂流者の男の存在により新婚夫婦の絆は壊されていく。

体も心も一人の漂流者に略奪されていく人妻の姿を、傾いていく心情と共に丁寧に描いています。

※ストーリーと背徳感を強めて寝取られ感を出すことを重視して執筆したため、寝取られに入るまでの過程を長くしています。

サクサクっと短編の寝取られ小説を楽しみたい方よりも、ストーリー性と背徳感重視の長編寝取られ小説を楽しみたい方向けの作品です。

主要登場人物

田代卓(夫)

田代友里(妻)

諸橋優斗(漂流者の一人でプロの格闘家)

目次

- 第1話 『生存者』
- 第2話 『サバイバル生活』
- 第3話 『罌に嵌められた夫婦』
- 第4話 『引き裂かれた絆』
- 第5話 『屈服する人妻の体』
- 第6話 『堕ちる人妻の心』
- 第7話 『人妻が最後に選んだ本物の雄』

第1話 『生存者』

田代卓と田代友里は、結婚したばかりの新婚夫婦だった。

年齢は、同じ年で25歳。

新卒で入社した会社で出会い、3年交際した後、無事にゴールインした。

勤めている会社は、小売業界では有名な会社で、スーパーマーケットを主力に全国展開していた。

二人はまるで運命かのように、出会ってからすぐに付き合いだした。

お互いが、お互いのことを一目惚れした状態だったが、友里から卓に告白して交際はスタートした。

二人は相性が抜群で、特に大きな喧嘩をすることもなく、交際は順調だった。

そして1年の同棲生活を経て、卓からプロポーズをして、結婚することになった。

普段は、忙しくともに休みも取れない二人だったが、新婚旅行のために、1週間の有給を取っていた。

二人は、周りから見ても羨ましがられるほどの美男美女でお似合いのカップルだった。

そんな幸せな二人に、突然悲劇は訪れた。

新婚旅行の最中で、乗っている船が沈没してしまったのだ。

何かに衝突したような凄い大きな音がした後、乗客の悲鳴が船内に響き渡った。

船体は、大きく傾き、その衝撃で何人もの乗客が海に投げ出された。

卓と友里は、自分たちの部屋に居たため、海に投げ出されることは回避できた。

しかし、大きく傾いた船体には衝突した際に破損した個所から海水が流れ込んでいた。

この船が沈没するのも、時間の問題であることは、素人の目から見ても明らかだった。

二人は、用意されていた緊急脱出用のボートに運よく乗り込むことができた。

しかし、乗り込んだ脱出用のボートは、荒波に飲まれて途中で転覆してしまった。

ボートに乗っていた全員が海に投げだされた。

「きゃあっ！卓助けて！」

「友里っ！待ってろすぐに行くから！」

友里は、パニックになり溺れかけた。

学生時代に水泳を習っていた卓は、友里の元に泳いで移動すると、友里を救出して転覆したボートにしがみついた。

ボートに乗っていた他の乗客の姿はすでになく、恐らく荒波に飲み込まれてしまっていた。

なんとか命からがら助かった二人だったが、沈没した場所から近くにあった無人島に流れ着いた。

この無人島を舞台に、生存者達の運命が交錯していく。

そして、決して離れるはずがないと思っていた卓と友里の絆も、この無人島でのサバイバル生活により壊れていく。

そのことを、まだ二人は知る由もなかった。

「友里大丈夫か？怪我はしてないか？」

無人島に流れ着いた妻の友里を心配そうに駆け寄った。

二人とも、海に流されたため服もビショビショになっていた。

事前に持ってきていた着替えなども全て海に流されてしまった。

「うん。私は大丈夫だよ。卓も怪我してない？」

友里は、泣きながら卓に抱き着いた。

二人は、抱き合いながらお互いの無事を喜び合っていた。

辺りを見渡しても、自分達以外は誰も見当たらなかった。

「ここってどこなの？私たち以外の人はいないの？」

友里が不安そうに卓に聞いた。

「わからない。多分、ここは人が住んでいない島なんだろうな。見た感じ、無人島だろうな。」

二人は、島周辺を歩き回ったが、人が住んでいる痕跡を見つけることはできなかった。

日常生活とは、まるでかけ離れている世界であることが、すぐに理解できた。

食料も無ければ、生活する道具さえ何も持っていない。

この島でこの先、二人でどうやって生活をしていけばいいのか？

突然、何も準備が無い状態で無人島に投げ出されてしまった二人は、途方に暮れていた。

「ねえ、私達これからどうなるのかな？」

「友里は何も心配するなよ。俺が守ってやるから。それに、きっとすぐに助けが来るさ。」

卓は、友里の不安をかき消す様に力強く答えた。

そんな卓に友里は不安そうな表情をしながら寄り添っていた。

とにかく、夜になり辺りが暗くなる前に、寝床だけは最低限確保しなければいけない。

どんな野生の動物が生息しているのかも、わからない無人島を、二人はただひたすら歩く回った。

結局、建物らしき物や人工的な構造物は、何一つ見つけることができなかった。

やはり、この島は人が生活できる場所ではないと、二人は再確認して絶望した。

唯一の救いは、歩いている時に偶然見つけた洞穴だった。

その洞穴は、奥行きがあり、どこまで続いているのかわからないほど大きかった。

「とりあえず、今日はここを寝床にしようか。ごめんな。こんな所しか見つけられなくて。」

「うん。怖いけど、外は怖いし。それに卓と一緒に居るなら安心だよ。」

友里は、不安そうな表情をしながら、卓に甘えるように抱きついた。

辺りを見渡すと、すでに暗闇に包まれていた。

二人は、不安に耐えるように抱き合いながら眠りについた。

朝目覚めると、二人は島周辺の探索を再開した。

この日は、食料の確保が最重要課題だった。

卓と友里は、昨日から何も食べていなかった。

すでに二人は空腹の状態で、喉もカラカラになっていた。

「友里大丈夫か？辛かったら、洞穴で待ってても大丈夫だからな？」

「ううん。大丈夫だよ。それに一人で待ってる方が怖いから無理。」

友里は、辛さを堪えて気丈に振舞っていた。

卓は友里のことを気遣いながら、島周辺を歩いて探索した。

しばらくすると、浜辺に人影が見えた。

男性と女性が、自分たちと同じく途方に暮れている様子で、座り込んでいた。

自分たちの他にも生存者がいたことに、二人は歓喜した。

急ぎ足で二人の元に近づくと、向こうも卓と友里に気づき喜びながら近づいてきた。

二人の名前は、木間巧と木間真紀。

30代前半の夫婦だった。

休暇を兼ねて、夫婦で旅行に来て沈没事故に巻き込まれてしまったようで、二人とも憔悴していた。

「あなたたちも、沈没した船からこの島に流れ着いたんですか？」

木間巧が、疲れ果てた表情で二人に質問した。

「はい。私たちも沈没事故の生存者です。なんとかこの島に辿りつきました。」

4人は、各々の状況を確認し合った。

木間夫婦も、卓たちと同じくこの無人島を探索していたようだった。

探索した結果は、両夫婦とも同じような結果だった。

人間が住んでいるような痕跡は全くない。

それどころか、寝床もなければ食料もない状態だった。

今の状態では、生命を維持することすらできない環境であることは、4人の間では共通認識だった。

「とにかく、食料と寝床だけでも確保しないと。」

4人共すでに空腹だった。

この状態が続けば、すぐに動けなくなってしまう。

「そうだね。でも、この島を歩いて探索したけど、食料らしい物なんてなかったよ。」

木間夫婦も、卓達と同じように島全体を歩いて探索していたため、ある程度は島の状況を把握していた。

「とにかく、もう一度島周辺を歩いて食料になる物があるか確認しましょう。」

卓がそう言うと、4人は食料を求めて再び島を探索し始めた。

「あれ何？煙が上がってる！もしかして人がいるんじゃない？」

しばらく歩くと、少し先の浜辺に煙が上がっていることに友里が気が付いた。

煙が上がっているということは、自分たち以外にも人間がいるということを意味していた。

木間夫婦と卓たちは、急いで煙が上がっている方向に向かって歩き出した。

煙が上がっている方向に歩いていくと、そこには3人の男達が火を起こして魚を焼いていた。

「あの・・・俺達は沈没した船の生存者ですが、あなた達も生存者ですか？」

卓が声をかけると、3人の男達が、少し驚いた表情で全員が卓達のことを見ていた。

3人の男性は、それぞれタイプが異なる男性だった。

近藤圭太→細身で気が弱そうな男

酒井直人→少し小太りで典型的な中年男性

そして、他の二人とは明らかに雰囲気も体格も違う異質な男性がいた。

その男性の名前は、諸橋優斗。

元自衛隊に所属していた過去があり、現役のプロの格闘家という異色の経歴の持ち主だった。

筋肉の鎧を纏っているかのように、ゴツゴツとした体格をしていた。

年齢も卓と友里と同じ25歳だった。

ゴツゴツとした体格に合わせたような、色黒で少しイカツイ顔立ちをしていた。

諸橋優斗は、卓達のことを一人一人品定めするようにじっくりと見ていた。

まるで、足のつま先から頭のとっぺんまで、チェックするかのように。

そして、諸橋優斗は友里のことを見ると、視線の動きを止めて固定した。

それも普通の男性なら不思議なことではなく、むしろ当然の反応だった。

友里は、今まで何回も芸能界にスカウトされるほどの美顔の持ち主だった。

街を歩けば、必ず芸能事務所のスカウトから声をかけられた。

顔の系統は、アイドル顔負けの正統派の美形。

胸もEカップと大きく、少し肉付きが良く男性ウケするような体系だった。

そのビジュアルから、常に男性から言い寄られ口説かれていた。

それは、卓と結婚してからも変わることはなかった。

数々の男から口説かれてきた経験がある友里は、この時直感的に理解した。

諸橋優斗が自分のことを性の対象としてみていることに。

その証拠に、視線は友里の顔、胸、下半身に集中していた。

卓や木間夫婦のことは、あまり興味がない様子だった。

女の直感なのか、友里は諸橋優斗のことを危険視するべき男性であるとすぐに認識した。

他の男性とは、明らかに違う独特の雰囲気。

野性的で動物のような強烈な雄の力強さと危険な香り。

諸橋優斗の視線に気づいた卓は、隠す様に友里の目の前に立った。

少しバツが悪そうな表情をしながら、話し始めた。

「ああ。俺達もあの船からこの島にたどり着いた生存者だよ。あんたらよりも先に合流して一緒に行動してたんだ。」

諸橋優斗は、少し不愛想な表情で答えた。

外見通り、ドスの聞いたような低い声をしていた。

「そうだったんですか。俺達はさっき合流して、一緒に食料を探してたんです。」

目の前には、諸橋優斗たちが焼いていた魚が美味しそうに焼けていた。

「なんだよ。あんたらもしかして何も食べてないのか？ずいぶん腹空かしてるような顔してるけど。」

「実は、俺達昨日から何も食べてないんです。もし良かったら、少し分けてもらえませんか？」

卓達は、諸橋優斗達に頭を下げて食料を分けてほしいとお願いした。

「おい。どうするよ？分けてもいいよな？」

諸橋優斗が、酒井や近藤のことを威嚇するように聞いた。

酒井や近藤は、言われるがままコクリと頷いた。

明らかに3人の中で諸橋優斗が一番年下だが、態度も大きく力関係がハッキリしていた。

「これから、救助が来るまでの間は、この島で一緒に生活していくことになる仲間なんだ。遠慮せずに食べよ。」

「助かった。ありがとうございます。」

卓達は、焼き魚と焼かれていた肉を分け与えてもらった。

4人は、空腹を満たす様に分けて貰った食料をすぐに食べ始めた。

約1日ぶりの食事は、信じられないほど美味しく感じた。

ただの焼き魚と適当に焼かれただけの肉がこれほどまでに美味しいのかと思った。

「ははは・・そんなにガッツくなよ。食料ならたくさんストックしてるから安心しろよ。」

諸橋は、余裕がある表情で4人のことを見て笑っていた。

「ほらよ。水もあるから遠慮しないで飲めよ。」

諸橋は、4人に海水から作った水を分け与えた。

「ありがとうございます。食料だけじゃなくて、水まで用意できるなんて凄いですね。」

「まあ、こう見えて意外と器用なんだよ俺って。無人島でも生活には困らないくらいスキルはあるから安心しろよ。」

諸橋は、得意そうな顔をしていた。

その視線の先には、常に友里がいることを、この時の卓は気づくことはなかった。

食事と水分補給すると、4人の表情は見違えるほどに明るくなった。

諸橋達との出会いにより、先が見えない無人島での生活に一筋の光が見えたことも大きな要因だった。

その後、7人は全員で円を組むように座り込み、今後について話し合った。

話し合いは、卓と諸橋が中心になり進められていた。

「救助が来るまでは、全員で協力して生活する以外に生き残る道はないと思う。」

「協力するのは賛成だが、必要以上に一緒に生活はしたくねーな俺は。」

卓は、全員で協力して生活していく方向で話をまとめようとしていた。

対照的に棚橋は、協力は最低限にして各々が好きなように生活するスタイルを希望していた。

「各々が役割分担を決めて協力し合う形でいいんじゃないの？困った時は、個別に助け合えばいいだけだろ。」

実際のところ、7人の内、無人島で生活をするスキルを持っているのは諸橋だけだった。

他の6人は、完全に素人で、食料の確保も一人ではできないレベルだった。

そのため、話し合いが進むにつれて、次第に諸橋の意見が優先される雰囲気になってい

た。

結局、話し合いの結果、次の5つのことが決め事として決定された。

- ・夫婦または個人ごとに生活スペースを確保する
- ・生活スペースは、全員で協力して作る
- ・食料は、基本的に自分で確保して個人間で管理する
- ・困った時は、お互いに協力し合う
- ・絶対に個人間で喧嘩や争いごとはしない

卓は、食料は全員で管理して共有すべきと意見を出していた。

しかし、それに関しては諸橋が猛反対した。

実際のところ、今保管してある食料も、諸橋が全て自分一人で狩りをして用意していた。

食料は有限で限られているため、全員で共有するのは不公平と言って諸橋は意見を曲げなかった。

狩りのやり方や水の作りからなども、全て諸橋を頼るしかない状況だった。

そのため、最低限のやり方をレクチャーしてもらうことを条件に、卓を含めた6人は、諸橋の意見を受け入れた。

まず7日が最優先で取りかかったのが、生活スペースの確保と作成だった。

しかし、仮住まいの家など、作ったことがないため、全員どうすればよいかわからず動け

ずにいた。

ただ、諸橋1人を覗いて。

諸橋は、積極的に男性陣に的確に指示を出した。

卓を含めた男性陣は、諸橋の指示に従って木の伐採を始めた。

無人島に流れ着いていた金属を器用に加工して簡易的なノコギリを諸橋が作ってくれた。

女性陣は、ロープや紐の代わりになりそうな素材を、島に流れ着いていたゴミを漁りながら探した。

全員で協力して苦勞の末に、3日かけて全員分の簡易的な居住スペースを完成させた。

卓と友里は当然同じ居住スペースを与えられた。

木間夫婦も同様に二人分の居住スペースを与えられ、他男性陣は1人ごとに居住スペースを確保した。

諸橋は、多少ワンマンな所もあるが、全員のことを考えて良心的に動いていた。

卓は、諸橋が独裁者のように仕切りだすことを危惧していた。

この時は、それはただの思い過ごしであったと安心していた。

しかし、無人島生活はまだ始まったばかりだった。

卓を含めた全員が、徐々に諸橋の本性を知ることになる。

寝床と居住スペースを確保することができた7人は、交流も兼ねて全員で食事会を開催した。

食事会と言っても、ここは何もない無人島。

お酒も無ければ、豪華な食べ物も無い。

ただ、諸橋達が保管していた食材を使って友里と真紀が調理しただけの質素な食事のみが用意された。

それでも、今の卓達からすると、少し前の状況よりも圧倒的に恵まれた環境だった。

もし、諸橋達と合流することができなければ、今頃自分たちはまともな食事にもありつかなかったかもしれない。

心から、諸橋達との出会いに感謝していた。

この時は・・・

後々卓は知ることになる。

諸橋との出会いがキッカケで、最愛の妻である友里を失ってしまう未来を・ ・ ・ ・ ・

交流会を兼ねた食事会は、絶望的な状況の中でも盛り上がっていた。

諸橋は、ワイルドな見た目通り、豪快な性格だった。

酒も無い状況でも、上手く冗談を言って、周りのことを盛り上げてくれた。

絶望的な状況の中でも、諸橋のような性格の人間が1人でも仲間内にいるだけで雰囲気はガラリと明るくなった。

しかし、よく見ると、自分達よりも先に諸橋と合流していた二人の男は、なぜか複雑な表情をしていた。

明らかに、作り笑いをして諸橋の機嫌を伺うような素振りを見せていた。

諸橋よりも、二人は年上だが、諸橋とのやり取りから力関係がどちらが上なのかは明白だった。

卓は、なぜかそのことが気になっていた。

しばらくすると、諸橋が卓と友里の元にやってきた。

「お疲れっす。楽しんでる？なんかちょっと暗い表情だけど。」

諸橋は、馴れ馴れしく友里に話しかけた。

隣にいる卓には、あまり興味がないような感じがした。

「はい。まあ・・・こんな状況なので、まだちょっと慣れてなくて。」

友里は、グイグイと馴れ馴れしく接してくる諸橋に少し驚き距離を取る様な話し方をしていた。

「まあそうだよね。無理もないよ。君みたいに綺麗な女性がこんな所にいたら危ないよね。」

「はあ・・・そうですね。少しずつ慣れていこうと思います。」

諸橋は、微妙な態度で接してくる友里のことを気にすることなく、馴れ馴れしく話しかけることを止めなかった。

「あっ！俺名前は諸橋優斗って言うんだ。よろしくね。優斗って呼んでよ。名前聞いてもいい？」

諸橋は、隣にいる卓のことには、話しかけることさえしなかった。

そんな諸橋の態度に、卓はイラつきを隠せないでいた。

「田代友里って言います。よろしくお願いします。名前で呼ぶのは恥ずかしいので、普通に諸橋さんって呼ばせてください。」

「そっか。名前で呼んでくれた方が嬉しいけど、それならしょうがない。じゃあ、俺は友里ちゃんって呼ぶね。」

諸橋は、夫である卓がすぐ隣にいる状況でも一切気にすることなく、馴れ馴れしく友里に話しかけ続けた。

友里の態度と表情を見ても、明らかに諸橋に対して微妙な空気を出していた。

「まあ、安心しなよ。何かあったら俺が友里ちゃんのこと守ってあげるからさ。遠慮なく話しかけてね。」

「ありがとうございます。でも私には卓がいるので大丈夫です。」

友里は、あまりにも馴れ馴れしくしてくる諸橋のこと牽制するような言い方をした。

「ああ。そっか。隣に旦那さんがいるもんね。ごめんごめん。なんか気分悪くさせちゃったかな。」

諸橋は、友里の反応を見て少しバツが悪そうな表情を見せた。

「友里のことは、俺が守るので大丈夫です。それより、諸橋さんは無人島で生活してた経験があるんですか？」

卓もそんな友里の態度を察して、二人の会話に無理やり割り込む様に入り込んだ。

「え？なんでそんなこと急に聞くの？」

友里との会話を邪魔されたことで、機嫌を悪くした藤村は不愛想な口調で卓に言い返した。

「いえ、寝床作りや食料の確保など手慣れていたもので。凄いなあと感心してたんですよ。」

卓は、諸橋の威圧的な態度に少し押されながら、機嫌を損ねないような言い方で質問した。

本当は、妻の友里に馴れ馴れしく話しかけていたこの男に対して、あまり良い印象を持てなかった。

ただ、この無人島での生活を生き抜くには、諸橋の力とスキルが必要不可欠であることはわかっていた。

ここで、この男と揉めて関係をこじらせるわけにはいかない。

そう感じた卓は、諸橋と上手く関係を築こうと努力する姿勢を見せていた。

「ああ・・・まあそう言われると気分が良くなっちゃうね。実は俺さ、数年自衛隊にいたんだわ。その時に色々学んだってわけ。」

諸橋は、わかりやすく機嫌を直して気分よく話し始めた。

「自衛隊にいらっしゃったんですか。すごいですね。だからそんなすごい筋肉してるんですね。」

正直な所、諸橋のことを褒めることに対して気分が悪く抵抗があった。

自分の愛する妻に馴れ馴れしく話かけてきたこの男のことを、卓は好きになれなかった。

諸橋の態度を見ても、友里に対して明らかに好意を抱いていることは、誰の目から見ても明らかだった。

そんな男に対して、機嫌を伺うように接しなければいけない状況にもどかしさと自分への情けなさを感じていた。

「まあ、ムカつく上司のことを殴ってクビになっちゃったけどな。それから、色々あってプロの格闘家になったわけ。」

諸橋は、気分が良さそうに自分のことを話し始めた。

話を聞いていると、まるで、学生の不良やヤンキーの自慢話を聞かされているような感覚になった。

話を聞けば聞くほど、諸橋が真っ当な人間ではないことがわかった。

自衛隊は、上司のことを殴ってクビになり、それからキャバクラのボーイをしたが、店の女の子に手を出してクビ。

しばらく無職の状態が続いていたが、女性のヒモとして家に転がり込んで生活したようだ

った。

その後、お金を上手く持っている女性に上手く取り入り、出資してキャバクラ店を経営していたが失敗。

借金まみれになり自己破産した後、格闘家に転身して現在は、この無人島に流れ着いたとのことだった。

話を聞いているだけで、この男が異常なほどの女性好きであることがわかった。

友里も、諸橋の話を横で聞いていて嫌悪感を露わにしていた。

「そうだったんですか。色々あったんですね。でもプロの格闘家って凄いですね。だから、そんな凄い体してたんですね。」

多少は諸橋の気分を良くさせるために話を合わせたが、これはお世辞ではなく、本音だった。

実際に諸橋の体は、筋肉の塊のように肉厚で、マッチョな外人にも負けないような屈強な体だった。

「まあね。格闘家になったのも、女にモテたかったからだしな。女好き過ぎて人生が狂ったよ。はははっ。」

諸橋は気分が良さそうに大きな声で笑っていた。

卓は、自分の細い体と諸橋の屈強な体を見比べて、同じ男として劣っているように感じ、惨めな気分になっていた。

その後も、諸橋は自分の今までの女性遍歴をべらべらと気持ちよさそうに話していた。

今まで付き合った女性の数と経験人数など、普通の男性では、考えられないような人数だった。

「すごいですね。諸橋さんは、女性からモテるんですね。」

不快だったが、卓は仕方なく諸橋の自慢話に付き合った。

「まあ、女性には昔からモテたね。特に押しに弱い女性とは相性が良かったよ。墮として自分の女にするのが気分良くてさ。」

なぜか、その時諸橋はチラッと友里に対して視線を向けた。

友里も諸橋の視線に気づいていたが、あえて気づいていない振りをして無視した。

まるで、友里のことを口説こうとしていることをアピールしているかのような視線だった。

「へえ・・諸橋さんは、ご結婚はされてないんですか？」

友里への視線に気づいていた卓は、イラっとする自分の感情を抑えながら話していた。

「結婚なんてしねーよ。まあ、友里ちゃんみたいに綺麗な女性となら本気で考えるけど

ね。」

諸橋は、卓のことなど気にする様子もなく、友里のことをチラチラ見ながら話していた。

「友里は俺は妻なので勘弁してください。諸橋さんなら女性には困らないでしょう。」

卓は、今すぐにでも諸橋のことを殴りかねないほどにイライラしていた。

友里の夫である自分の目の前で、そんな発言をする諸橋の人間性を疑った。

「まあ、女性には正直困ってないけどさ。でも卓が羨ましいよ。友里ちゃんみたいな女と結婚して。俺と変わってくれよ。」

馴れ馴れしく下の名前と呼んでくる諸橋のことが気に食わなかった。

同い年だが、卓は敬語を使って丁寧に話していた。

しかし、諸橋は遠慮することなく、敬語も使わずにタメ口で、勝手に下の名前と呼んできた。

もう、普通に話すのも限界に近かった。

「話は変わりますが、明日にでも、みんなに食料の取り方を教えてもらえませんか？」

雑談を強制的に終え、卓は本題に入った。

「ああ。まあ、そうだな。教えてやらないと、俺以外の全員が飢え死にしちまうからな。」

諸橋は、少しめんどくさそうに答えた。

「ありがとうございます。ぜひ、お願いします。」

諸橋のような人間にお願いするのは、正直嫌だった。

しかし、この無人島で生き残るためには、食料を確保するスキルは必須であることは明白だった。

「でもよ、多分教えてもすぐには、できるようにはならないぜ？俺も自分のことで精いっぱいだから、最低限の協力しかできないからな。」

諸橋の表情は、先ほどとはガラリと変わり、嫌そうな表情で答えた。

その後、棚橋は卓達夫婦の元を離れ、今度は木間夫婦の近くに移動していた。

そこでも、諸橋は真紀さんに対して一方的に話しかけていた。

夫の巧が隣にいることなど、気にすることなく話しかけていた。

真紀は、30代で年相応だが、整った顔立ちの女性だった。

友里と同じく控えめで大人しい性格だが、夫の巧のことを上手く立てる気立ての良い性格だった。

夫の巧は、卓よりも大人しい性格で、典型的な草食系男子といった感じで、諸橋とは真逆のタイプであった。

案の定、妻の真紀が隣で諸橋から一方的に話しかけられても、オドオドしているだけのような状況だった。

「ねえ、大丈夫かな？真紀さん達・・・諸橋さんってちょっと強引というか馴れ馴れしすぎるよね。」

友里が聞こえないように小さい声で話し出した。

「ああ。本当だよな。さっきはごめんな。嫌な思いさせて。あいつの機嫌にとってやらないと生活に支障が出ると思ってさ。」

友里は、心配そうに木間夫妻の様子を見ていた。

卓も、話に割って入ろうか悩んでいた。

そうこうしている内に、諸橋は真紀にさらに近づき手を触りながら話しかけていた。

「真紀さんって言うだ。綺麗な人だな。旦那さんは、しょぼそうだけど。」

諸橋は、真紀の前で夫である巧のことを馬鹿にしていた。

「あの・・ちょっと近いので離れてくれますか？それに手も触らないでください。」

真紀は、巧が馬鹿にされたことと馴れ馴れしすぎる諸橋の態度に我慢できなくなっていた。

キツイ口調で、牽制するように諸橋に伝えた。

「ああ。悪い悪い。そんなつもりじゃなかったんだけさ。ただ、俺はみんなと仲良くなりたかっただけだよ。ごめんな。」

大人しいが、意外とハッキリとした態度を取る真紀に驚い諸橋は、大人しく引いた。

巧は、ただオドオドとしていただけで、一切会話に入ることはできなかった。

その後、諸橋はパシリに使っている仲間の男性二人の元に戻り、八つ当たりをしていた。

上手く口説けなかったことへのイライラと真紀にキツく対応されたことが原因だった。

「ねえ、本当にこの先あんな人とうまくやっていけるのかな・・私不安になってきた。」

諸橋の態度を見ていた友里が、不安そうな表情でボソッと呟いた。

卓も同じような思いだった。

よりによって、一番必要不可欠な男が諸橋であること一番の問題だった。

少しでも目を離すと、また友里や真理のことを口説きかねないと不安になっていた。

結局、そのまま全員は解散し、後味が悪い食事会になってしまった。

第2話 『サバイバル生活』

次の日、昼前に全員が浜辺に集まった。

目的は、食料の確保のスキルを習得するためだった。

諸橋は、面倒そうに全員の前に立つと、魚の取り方からレクチャーし始めた。

ただ、ここは文明とはかけ離れた無人島。

道具は何もないため、棒状の木を削り自分達で使えるサイズの武器を作った。

幸いなことに、無人島周辺の海は綺麗で透き通っていた。

さらに、避難用に使っていた緊急用のボートも2体無人島に流れ着いていた。

2組の分かれて、緊急用のボートに乗り込んだ。

卓と友里のボートに狙ったように諸橋が乗り込んできた。

「夫婦水入らずのところ悪いね。昨日はよくしてくれたから、俺が直接レクチャーしてやるよ。」

直接教えてもらえるのは、嬉しかったが複雑な気分だった。

明らかに、友里が目当てで自分たちのボートに乗り込んできていたことは明白だった。

他の部下二人も、諸橋と一緒に行動していたため、ある程度は魚の取り方を学んでいた。

木間夫婦の乗っている緊急用のボートには、諸橋の部下二人が乗り込んだ。

友里は、諸橋に対していあからさまに嫌悪感を露わにしていた。

諸橋は、昨日と同じく卓の目の前ということも気にせず、友里に対して馴れ馴れしく接してきた。

「じゃあ、まずは実際に魚を取ってみようか。友里ちゃんからやってみよう。」

馴れ馴れしく友里ちゃんと呼ぶ諸橋に卓はイラっとした。

「わかりました。よろしくお願いします。」

友里は、不快な気持ちを押し殺して諸橋の指示に従った。

実際に海に出て、魚を取るのは思った以上に難しかった。

慣れている諸橋は、狙った魚を簡単に取れるが、卓と友里は中々取れなかった。

「友里ちゃん違う違う。そういう時は、体の使い方をこうするんだよ。」

諸橋は、魚の取り方をレクチャーする振りをして、度々友里の体に触れようとしていた。

自分の愛する妻の体を、目の前で触っている諸橋のことを今すぐにでも殴りたい衝動に駆られていた。

まるで、卓に見せつけるように友里の体を触る諸橋。

友里も、諸橋が意識的に自分の体に触れてきていることを察していた。

「あの・・・教えてもらえるのは、本当に助かりますけど、あまり体に触らないでほしいです。」

我慢できずに、友里が直接諸橋に注意した。

「え？でも、こうやって教えないといつまでもできるようにならないでしょ。こういうのはさ、体で覚えないとな。」

諸橋は、嫌な笑みを浮かべながら答えた。

卓には、この時の諸橋の発言が違う意味で言っているように聞こえた。

そして、それは勘違いではなかったことを、後々知っていくことになる・・・

「諸橋さん、申し訳ないですが、俺にもレクチャーをお願いします。」

我慢できず、卓が直接諸橋に声をかけた。

「あ？まずは友里ちゃんから覚えてもらう方が先でしょ？意外と魚とりは、繊細な女性の方が向いてるんだよ。」

無理やり理由をつけて、友里と接する時間を作ろうとしていることは明白だった。

その後も、卓は放置される形で諸橋のレクチャーは続いた。

時間にすると約5時間前後だった。

卓に諸橋が直接レクチャーしたのは、たった30分だけだった。

残りの4時間30分は、レクチャーと称して友里の体に触れ続けていた。

当然、そんな手抜きのレクチャーで魚の取り方を学べるはずもなく、卓も友里も技術を習得することはできなかった。

それは当然だった。

諸橋自身も、卓と友里が自分で魚を取れるようになるように教える気など、初めからサラサラなかったのだから・・・

浜辺に戻ると、卓達は木間夫婦と合流して感想を言い合った。

卓達と同じく、今日のレクチャーだけでは、木間夫妻も魚を取れるようにはならなかった。

諸橋の子分のような男達は、まともに教えてくれさえしなかった。

「よーし。じゃあ、魚の取り方は、こんな感じで大丈夫かな？」

諸橋が卓夫婦と木間夫婦に問いかけた。

「あの・・・今日のレクチャーだけでは、正直まったく自分達だけで魚を取れる気がしません。もう少し丁寧に教えて貰えませんか？」

我慢できずに卓は、少し苛立った様子で諸橋に話しかけた。

「あ？なんで？今日のレクチャーだけで十分でしょ。まだ、他にも教えなきゃいけないことがたくさんあるんだからさ。」

諸橋は、面倒そうに答えた。

「・・・わかりました。とりあえず、明日も引き続きご指導お願いします。」

卓は、納得していなかったが、これからのことも考えて、一歩引いて対応した。

自分たちの就寝スペースに戻ると、我慢していた友里は不満を爆発させた。

「何あいつ！気やすく私の体をペタペタと触ってきてさ。本当に気持ち悪かった。」

「ごめんな。俺も注意したかったけど、今はあいつに頼るしかないからさ。」

諸橋に対する不満を爆発させる友里を、卓は必死になだめた。

「卓は悪くないよ。ただ、あいつが気持ち悪すぎるだけ。私、あいつみたいに軽薄な男って本当に嫌い。」

友里は、諸橋のことが生理的に受け付けない様子だった。

男性ウケするビジュアルのため、今までも数多くの男性から口説かれてきた。

その経験から、男性のことを見抜く目は確かだった。

諸橋は、友里が今まで自分のことを口説いてきた男性の中でも、群を抜いて女好きであることに気づいていた。

「友里・・・ごめんな。俺がもっとしっかりしていれば、あんな奴に頼らないでもいいのに・・・」

卓は、自分が情けなくなった。

「卓は何も悪くないよ。私のこと守ろうと頑張ってくれてるもん。卓がいなかったら私多分この島で生きていくの無理だもん。」

そう言うと、友里は卓に抱きついた。

「いつまでこんな生活が続くのかな・・・救助の人はいつ来るのかな・・・」

興奮が収まった友里は、こんな生活がいつまで続くのか不安な気持ちを押し殺せずにいた。

そんな友里のことを、卓は強く抱きしめた。

「大丈夫だよ。友里のことは俺が絶対に守るから。それに、救助だって、すぐに来てくれるさ。」

「うん。ありがとう。卓大好き。」

友里は、甘えるような表情をして、卓を見るとキスをせがむように顔を上げて目を閉じた。

卓は、そんな友里のことを愛おしそうに見つめた。

「卓・・・キスして。」

二人は唇を重ね、無人島に来てから、初めて愛し合った。

「ん・・・卓・・・好き・・・あ・・・好き・・・」

「はあ・・・ああ・・・友里・・・好きだよ・・・愛してる・・・」

二人は、肌を重ねお互いの気持ちを確認合うように愛し合った。

卓と友里は、お互いセックスに対してはあまり積極的ではない。

特に卓は、消極的な性格から女性経験は友里だけだった。

友里も男性経験は卓だけだった。

お互い初めて同士だったため、二人が初めて結ばれたのは付き合ってから1年後だった。

普通の男性であれば、友里のような魅力的な女性と付き合えば、その日のうちにでも手を出すのが普通だろう。

しかし、卓は元々性欲が強くなく、セックスに対しても興味が普通の男性よりも薄かった。

友里自身も、セックスに対して興味どころか嫌悪感すら感じていた。

二人にとってセックスは、性欲を満たす行為ではなく、お互いの気持ちを確認し合う儀式のようなものだった。

そのため、二人のセックスはいつも決まったようにワンパターンだった。

普通の女性であれば、不満を感じてしまうくらい、卓はセックスに対して不器用だった。

「はぁ・・・友里・・・ごめん・・・もうイキそう・・・」

繋がってから数分経過しただけだが、卓はもう絶頂を迎えようとしていた。

「いいよ・・・ん・・・卓・・・好き・・・ん・・・卓・・・」

友里は、卓に抱きつきながら、気持ちを確認し合うように卓を求めた。

「はぁ・・・友里・・・好きだ・・・ああイク・・・」

射精の瞬間、卓は自分の性器を友里の中から抜いた。

ピュッ

子供の水鉄砲のように、卓の小さな性器から少量の精液が友里のお腹に放出された。

「はぁ・・もう出ちゃった。また俺だけ満足しちゃってごめん。」

卓は、申し訳なさそうな表情をしていた。

「ううん。私は大丈夫だよ。卓とこうやって愛し合えるだけで幸せだもん。」

友里は、起き上がると卓に甘えるようにキスをした。

「友里・・・・・」

卓は友里のことを愛おしそうに抱きしめた。

二人は、しばらくお互いの気持ちを確認合うように抱きしめ合っていた。

そんな二人の様子を、諸橋は外から隠れながら覗き込んでいた。

「なんだよあのヘタレ。短小の早漏かよ。あんな奴に友里ちゃんみたいないい女は不釣り

合いだろ。」

諸橋は、友里の裸を見ながら、自分の性器をシゴいていた。

「はぁ・・はぁ・・絶対に俺の女にしてやるぞ。友里・・ああ・イクッ・・」

グチュ ドピュ

ものすごい勢いで、大量の精液が辺り周辺に飛び散った。

「はぁ・・はぁ・・待ってろよ。すぐに俺の女にしてやるからな。」

諸橋は、友里の顔を見ながら、射精したばかりの自分の性器をシゴき続けていた。

卓と友里は、まさか諸橋から覗かれていることも知らずに、身を寄せ合いながら一時の幸せを感じていた。

そして、翌日も諸橋による講習が始まった。

昨日とは違い、この日は野性の動物の狩りのやり方を学ぶことが目的だった。

この日は、手作りの武器を持ち、全員で森の中に入った。

森に入ると野生のイノシシやタヌキなど、普段の生活では見ることがない

諸橋は、全員に狩りのやり方をレクチャーした。

友里は優しい性格のため、動物を殺めることはできないと積極的に学ぼうとはしなかった。

この島で生き抜くには、自分たちで食料を確保することは必須だった。

卓は、狩りのスキルを学ぶために、必死になっていた。

しかし、そんな卓にはまったく興味を示さずに、諸橋は友里や真紀にばかり話しかけていた。

その態度からは、狩りを教える気など、まったくないように感じられた。

友里や真紀は、嫌悪感を露わにして、しつこく話しかけてくる諸橋に対応していた。

「諸橋さん、狩りは男性の仕事なので、女性陣よりも俺達を中心に教えてください。」

我慢できずに卓は強い口調で諸橋に言い放った。

「あ？女性だって覚えないとダメだろ。男は勝手にできるようになるから大丈夫だよ。もう覚えただろ？」

まだ、森の中での狩りのレクチャーを初めて2時間しか経過していなかった。

「教えてもらってる立場でこんなことを言いたくありませんが、もっとちゃんと教えてください。これじゃあ、覚えられません。」

卓は、イラつきを抑えながら諸橋に焦る様に伝えた。

諸橋の性格と人間性から、自分たちに食料確保のノウハウをまともに教えてくれる機会は、今回だけだと感じていた。

友里のことを守るためにも、諸橋の機嫌を悪くさせようとも、この機会は絶対に逃すことはできなかった。

「なんだよ俺が適当に教えてるってことか？喧嘩売ってんのかお前？」

卓の言葉に諸橋は一気に表情と態度を変えた。

その場は、一瞬にしてピリッとした空気に変わっていた。

「いえ、そういうわけではないんですけど・・・女性陣だけではなくて男性陣にも積極的に教えてほしいです。」

卓は態度を変えた諸橋に怯えながらも、しっかりと自分の意志を伝えた。

「わかったよ。じゃあ、お前には特別に俺が付っきりで教えてやるよ。おいっ！お前らは他の奴らに教えてやれ。」

諸橋は、子分の近藤と酒井に偉そうに命令した。

諸橋は、イラついた様子で卓に自分の後を付いてくるように言うと、二人は森の奥に消えていった。

友里は、そんな卓の背中を心配そうに見つめていた。

諸橋とのマンツーマンでの狩りの講習は、卓にとっては、まさに地獄だった。

普段から体を動かすことに慣れている諸橋の動きについていくだけでも、体力を消耗した。

加えて、先ほどの卓の言動が許せなかったのか、諸橋の卓に対しての接し方もキツくなっていた。

「なんだよお前こんなこともできねーのかよ？何にもできねーんだな。使えねーやつ。」

まるで、卓のことを虐めることが目的のような態度と言動だった。

卓は必死に耐えた。

友里のことを守るために、狩りのノウハウは必須だった。

しかし、諸橋は知っていた。

狩りのノウハウが、たった1日で覚えられるものではないことを。

そして、初めから卓達に全てを教える気など、サラサラなかった。

諸橋にとっては、友里に近づくための策略の1つにすぎなかった。

結局、形だけの講習は終わった。

諸橋にイビられ身も心もクタクタになりながら、卓は友里の元に戻った。

「卓大丈夫だった？」

友里は、疲れ果てている卓の様子を見て、心配そうに駆け寄った。

「大丈夫だよ。ちょっと疲れてけど。そっちはどうだった？」

卓は、友里に心配をかけたくなかったため、気丈に振舞った。

「そっか。良かった。諸橋さんにイジめられてないか心配だったの。こっちは大丈夫だったよ。近藤さんも酒井さんもいい人で、優しく教えてくれたから。」

同じ男として、諸橋にイジめられたことなど、恥ずかしくて友里には言えなかった。

自分の無力さを痛感して情けないと感じている時、卓達の元に諸橋がやってきた。

「お疲れっす。これで、狩りのやり方もバッチリでしょ？もう俺から教えることはないんで、後は自分達で上手くやってね。」

そう言うと、諸橋は足早に去っていった。

「もう教えてくれないんだ。これで本当に自分達だけで、やっていけるのかな・・・」

友里は、不安そうな顔をしていた。

卓も同じ気持ちだった。

具体的な狩りのやり方など、教えてもらえなかった。

ただ、1日中諸橋にイビられ、男としての能力の差を見せつけられて無力感に包まれただけだった。

「大丈夫だよ。そんなに心配するなよ。明日からは、俺がちゃんと食わせてやるからさ。」

卓は、友里を不安な気持ちにさせないために、あえて強がって答えた。

「卓・・・ありがとう。なんか安心した。」

友里は、泣きそうな顔になりながら卓に寄り添った。

「あの・・今日はありがとうございました。上手く教えることができずに申し訳ないです。」

そんな時、二人の後ろから男性の声がした。

二人が振り向くと、そこには諸橋の子分の近藤と酒井がいた。

二人は、申し訳なさそうな表情をしていた。

「近藤さん、酒井さん。今日は本当にありがとうございました。私達みたいな素人に丁寧に教えてくださってわかりやすかったです。」

友里は、諸橋とは対照的に子分の二人には良い印象を持っているようだった。

卓は、諸橋の子分ということもあり、二人のことを信用できず、むしろ警戒していた。

「あの・・こんなこと言うのもなんなんですが、諸橋が見てない時だったら、俺達も皆さんに協力できるんで、困ったことがあったら教えてください。」

酒井が、周りを気にしながら二人にボソッと伝えるように言った。

恐らく、棚橋に聞かれていないか確認していたのだ。

二人は、何かに怯えているような様子だった。

「なぜ、諸橋さんが見てない時だけなんですか？そんなに警戒する理由はなんですか？」

気になった卓は、二人に問いかけた。

「いや・・・実は諸橋から、最低限のことだけ教えて、それ以上は協力しないように言われてるんです。」

「それは、なぜですか？」

卓は、言いずらそうにしている二人に深堀するように質問した。

「諸橋は、多分この島で自分が王様になりたいと考えているんです。もっとハッキリ言うと、みなさんのことを仕切る立場になりたいんでしょうね。」

諸橋の子分が口にしたのは、卓が最も恐れていたことだった。

「王様ですか・・・諸橋さんらしい発想ですね。でも、本当にそんなことができると思って
るのかな？」

黙って会話を聞いていた友里が、不思議そうな顔をして口を開いた。

「諸橋は、結構本気で王様になる気でいますね。自分がいなかったら、どうせ全員この島で生きていけなくなると真顔で言っていましたから。」

近藤と酒井の言葉を聞き、二人の不安な気持ちは一気に強くなった。

そして、最後に二人は、気まずそうな顔で卓と友里に伝えた。

「それと・・・諸橋は友里さんのこと気に入ってるみたいなので、気を付けた方がいいですよ。」

卓には、その言葉が一番胸に突き刺さった。

「あの男は、自分が狙った女性は、どんな手を使っても必ず自分のモノにしてきたと自慢げに豪語してましたから。気を付けてください。」

卓と友里は、二人の話を聞き、諸橋に対して警戒心を強めた。

「教えてくれてありがとうございます。でも、お二人はなぜ諸橋さんと行動を共にしてるんですか？」

話を聞いていると、明らかに二人は諸橋に対して、あまり良い印象を持っていないことは明らかだった。

「まあ、情けない話、諸橋が怖いですね。それと、この島での生活は、自分達だけでは生き抜くことができないので。」

諸橋は、恐怖政治で二人のことを支配しているようだった。

近藤と酒井は、そのまま諸橋の元に戻っていった。

「諸橋さんには注意しないとな。何かされたら、すぐに俺に教えてくれ。」

「うん。わかった。あんな人とは、もう関わり合いたくないよね。」

友里は、より一層諸橋に対して嫌悪感と警戒心を強めた。

二人は、そのまま自分たちの就寝スペースに戻った。

少しすると、二人の元に巧が焦った表情で息を切らしながら現れた。

「すみません。真紀の姿が見えなくて。どこに居るかわかりませんか？」

巧の話だと、今日の森での狩りの講習後に、体を洗うために、一人で川に向かってから行方がわからなくなったようだった。

「自分たちの所には、来てないですよ。俺達も探す手伝いますよ。」

焦った表情の巧を見て、心配になった卓達は、一緒に真紀のことを探すことにした。

もうすでに辺りは暗くなっていた。

視界が悪く周りが全く見えない状況だった。

無人島のため、辺りを照らす街灯やライトも存在しない。

卓は、川辺を中心に探していると、少し先から物音と男女の声が聞こえてきた。

「嫌っ！何するんですかっ！やめて」

真紀の声だった。

「いいだろ大人しくしてろよ。どうせ、あんなヘタレ旦那じゃ満足してないんだろ？」

そして、そこに居たのは真紀だけではなく、もう一人男性がいた。

それは、諸橋だった。

二人のやり取りを聞いていて、卓はすぐに何が起きているのか理解できた。

諸橋が、真紀のことを犯そうとしていたのだ。

すぐに止めなければいけない。

しかし、諸橋への恐怖心からなのか、卓は体を動かすことができなかった。

茂みに隠れ二人の様子を心配そうに見ていた。

「きゃあっ！触らないで変態・・・嫌っ！やめて」

真紀は、必死に抵抗していたが、諸橋の腕力には敵わずされるがままの状態になっていた。

無理やり服を脱がされると、真紀の熟した綺麗な体が露わになった。

「綺麗な体してるな。年上の女もやっぱり悪くねーな。すぐに気持ち良くしてやるからよ。」

諸橋は、興奮した様子で自分の服を脱いだ。

格闘家らしく、ゴツゴツとした筋肉の塊のような大きな体だった。

諸橋は、真紀の体にむしゃぶりついた。

「いやあ！誰か・・・助けて・・・」

真紀は、必死に声を上げて抵抗した。

しかし、昼間諸橋にイビられた記憶が蘇り、卓は体を動かすことができなかった。

そうしている間に、真紀の体は諸橋に蹂躪されていった。

全身を諸橋に舐められて、秘部を手で荒々しく触られていると、真紀の体は徐々に反応してしまっていた。

「なんだよ嫌がってる割には体はちゃんと反応してくれるみたいだな。もう濡れてるじゃねーか。」

諸橋は、イカツイ外見とは反対に、女性の体を触る時は指先を器用に動かしていた。

女性経験が豊富で、女性の体を知り尽くしている諸橋は、セックスのテクニックも上級者以上だった。

真紀の秘部からは、すでに透明な液体が溢れ出ている。

「・・・んっ・・・んふ・・・いや・・・あ・・・」

次第に、真紀の体は諸橋の動きにリンクするようになり始め、口からも甘い吐息が漏れ出し始めていた。

あんなに嫌がっていた真紀は、次第に抵抗する力を弱めていった。

明らかに、諸橋の行為によって感じ始めていた。

卓は、その様子を呆然と眺めているしかできなかった。

「どうだ？もう感じてきただろ？お前が溜まっていたのは見ててわかってたよ。俺が満足させてやるからな。」

諸橋は、パンツを脱ぐと勃起した自分の性器を真紀の顔に擦りつけた。

卓は、諸橋の性器を見て驚いていた。

露出された諸橋の性器は、想像を絶するほどの大きさだった。

同じ男として、完全に自信を喪失させられるレベルのサイズだった。

「これ舐めてくれよ。奥さんの口の味を楽しませてくれ。」

真紀の口に無理やり性器を擦りつけ始めた。

「早く舐めてくれよ。本当は、舐めたいんだろ。素直になれよ。楽しもうぜ。」

諸橋は、性器を真紀の唇に押し付けながら、乳首を抓り刺激を与えた。

「ん・んふ・ちゆく・んん・ん」

諸橋は、真紀の口が半開きになった瞬間を見逃さなかった。

無理やり自分の性器を真紀の口の中に入れ込んだ。

「いい顔するな。もっと舌動かせや。」

諸橋は、興奮した様子で真紀の顔を持って自分で腰を振って口の中に自分の性器を出し入れした。

「んぷ・・くちや・・ん・・くちゅ・・・んふ・・」

真紀は、苦しそうな表情を見せた。

しばらく真紀の口の中を味わうと、諸橋は自分の性器を抜いた。

諸橋は、唾液でドロドロになった性器を、真紀に見せつけた。

綺麗でキリっとした顔立ちの顔が、今は崩れメスの表情になっていた。

無理やり両足を開き、自分の体を潜り込ませた。

「そろそろ入れてやるからな。おら、もっと足開けよ。」

諸橋は、自分の性器を真紀の秘部に無理やり当てがった。

「ちょっ・・やめて・・それだけは・・入れないで・・お願い。」

真紀は、体に力が入らないのか、弱弱しく体を振りながら抵抗していた。

「大丈夫だよ。すぐに気持ち良くしてやるからよ。旦那よりも感じさせてやるよ」

ぐちゅ くちゅ

諸橋は一気に真紀の中に自分の性器をねじ込んだ。

「んはっ・・・いや・・・ああ・・・いたい・・・」

挿入された瞬間、真紀の口からは甘い吐息と雌の声が漏れ出した。

「中々いい締まりしてんじゃねーかよ。あんまり旦那とやってねーのか？もっと感じさせてやるからな。」

諸橋は嬉しそうに腰を振り動きを止めなかった。

次第に、諸橋の動きに呼応するように、真紀の体は小刻みに揺れだした。

「んあ・・・あん・・・はあん・・・あん・・・すごい・・・んふ・・・」

真紀はすでに抵抗することを止めていた。

口元からは、甘い吐息と喘ぎ声が漏れ出していた。

「いい声で感じてくれるじゃねーか。気持ちいいんだろ？旦那じゃ満足してなかったみてーだな。」

諸橋は、真紀の反応を見て、自分の中の支配欲を満たしていた。

「俺じゃねーと感じられない体にしてやるからな。今日からお前は俺の女だ。」

「ん・・ああん・・だめ・・あん・・すごい・・ん・・」

真紀は、諸橋に与えられた快楽に流されていた。

普段の清楚でキリっとした清潔感のある真紀の姿は、もうどこにもなかった。

諸橋と性器を深く繋げ合い、両足を自分から諸橋の腰に絡めていた。

そして、諸橋は絶頂に達しようとしていた。

「はか・・はあ・・おい・・口の中に出してやるから飲めや。」

諸橋は、絶頂に向けて腰の動きを速めた。

「あん・・だめ・・んあん・・んう・あ・・・ああん」

諸橋の動きに比例するように、真紀の喘ぎ声も大きくなっていた。

「はぁ・はぁ・イク・出すぞ・ぁぁっぁぁっ！」

雄叫びのような声を上げた瞬間、真紀の中から自分の性器を抜き出した。

そして、真紀の顔に大量でドロドロの精液をかけた。

真紀は、諸橋から言われた通り、自分から口を大きく開けて精液を受け入れていた。

「はぁ・はぁ・吐き出すなよ。一滴残らず飲み干せ。俺の味をしっかりと覚えろ。」

諸橋は、上から真紀のことを見下ろして偉そうに命令した。

「ん・んぷ・う・ごくっ・はぁ・はぁ・」

真紀は逆らうことなく、口の中に大量に放出された諸橋の精液を飲み干した。

「俺の味を忘れるなよ。ヘタレ旦那よりも濃いだろ。ほら、綺麗にしてくれや。」

諸橋は、自分の性器を真紀の口元に近づけた。

その性器を、真紀は自分から舌で舐めて綺麗にしていた。

「なんだよこれ・・・なんで、あんな奴の言いなりになってるんだよ・・・」

茂みに隠れて二人の様子を見ていた卓は、衝撃的な状況に心の声が漏れてしまっていた。

「ん・・・くちゅ・・・ん・・・」

諸橋は、自分の性器を素直に舐める真紀のことを満足そうに見下ろしていた。

「これで。今日からお前は俺の女だ。また俺が抱きたくなったら抱いてやるからな。俺の味も忘れるんじゃないぞ。」

諸橋は、行為を終えると服を着て満足そうにその場を去っていった。

一人残された真紀は、裸のまましばらくの間、余韻に浸る様に呆然としていた。

卓は、出ていくタイミングがわからず、茂みに身を潜めていた。

自分のことが、信じられなくらい情けなくなった。

諸橋への恐怖心から、目の前で無理やり抱かれている真紀のことを助けようとしなかった自分を責めた。

そして、諸橋のセックスを見て、自分と諸橋の雄としての格の違いも見せつけられた気分になっていた。

「狙った女性は、必ず自分の女にする。」

諸橋の支配欲に、卓は恐怖すら感じていた。

心のどこかで、ここに居たのが、妻の友里ではなく真紀でよかったと考えてしまっていた。

卓が、そんなことを考えていると、真紀は服を着てその場を立ち去ろうとしていた。

そのタイミングで、真紀のことを探していた夫の巧が息を切らせながらやってきた。

「はぁ・・・はぁ・・・真紀探したんだよ。どうしたの何かあったの？」

真紀の様子がいつもと違うことに気づいた巧は、心配そうに聞いた。

すると、真紀は急に大声で泣き出した。

真紀は、しばらく巧みに抱きつきながら泣き続けた。

落ち着きを取りも出した真紀は、自分の身に起こったことを全て巧に伝えた。

タイミングを見計らって、偶然を装って卓も二人の元に合流した。

そして、いつの間にか友里も3人の元に合流した。

怒りに打ち震えた巧は、呆然としている真理のことを、自分達の就寝スペースに連れて行った。

そして、そのまま怒りの形相で諸橋の就寝スペースに向かった。

心配になった卓も巧の後を追った。

友里は、そのまま真紀に付き添っていた。

「おいっ！お前俺の妻になんてことしてくれたんだよ。どういうつもりだよ。」

普段はひ弱で大人しい性格の巧とは思えないような表情で諸橋に詰め寄った。

「ああ？なんだよそんなことかよ。お前の奥さんも喜んでたから問題ないだろ？お前が満足させてやらねーから悪いんだよ。」

しかし、そんな巧の様子を見ても、諸橋は余裕の表情を崩さなかった。

「何？真理が嫌がってるのを、お前が無理やりしただけだろ。適当なこと言ってんじゃねーよ。」

横で二人の言い合いを聞いていた卓は、諸橋が言っていることもまんざら嘘ではないことを知っていた。

あの時、真紀の体は確かに雌としての喜びを感じてしまっていた。

当然。諸橋もそのことに気づいていた。

「嘘だと思うなら、俺とお前どっちに抱かれた方が気持ちよかったのか、直接奥さんに聞いてみろよ？」

諸橋は、勝ち誇ったように巧みに言い放った。

「適当なことばかり言ってんじゃねーよっ！この野郎っ！」

巧は、怒りが頂点に達して諸橋に殴りかかった。

ドゴッ　ドスッ、　ボスッ

「っう・・・くそ・・・やろう・・・」

ゴリラのような体格をしている格闘家の諸橋に勝てるはずもなかった。

ひ弱な巧は、あっけなく返り討ちにされてしまった。

「んだよおめー。マジでカスだな。そんなんだから、奥さんのことも満足させられねーんだよ。」

諸橋は、そう言うと巧のことを殴り続けた。

「おいっ！もういいだろ！これ以上はやり過ぎだ。やめろっ！」

そばで見ていた卓は、すぐに諸橋を止めに入った。

「ああっ！？おめーは引っ込んでろよ。」

力で諸橋に勝てるはずもなく、卓も一緒になって殴られた。

「そいえばよ、おめーの奥さん、俺に抱かれてる時は気持ちよさそうに喘いでたぞ。お前にも聞かせてやりたかったよ。」

諸橋は、巧のことを殴りながら、挑発するような言葉を浴びせ続けた。

しばらく殴られ続けると、諸橋は二人のことを解放した。

帰り際に諸橋は卓に対してこう言い放った。

「この際だから言っておくけど、俺の本命は友里ちゃんだからさ。俺に奪われないようにちゃんと守ってやれよ。まあ、絶対に俺の女にしてやるけどな。」

その言葉を聞き、諸橋が真紀のことを無理やり抱いた光景を思い出した。

性欲の獣のように真紀を抱き、雄の力で真紀を屈服させていた光景を。

自分の愛する友里が、こんなゲスで野蛮な男のことを受け入れるはずがない。

しかし、諸橋の圧倒的な雄としての力を実際に目の当たりにした卓は、冗談として聞き入れることができなかった。

そして、諸橋が言っていることが、冗談ではないことを、卓は徐々に知っていくことになる．．．．．